

## ハーバード美術館蔵「如意輪観音像」について — 在米の大安寺関連絵画 —

当館学芸部情報サービス室長 北澤 菜月

筆者は本年一月から三月まで「ミュージアム専門職員等在外派遣研修」のため米国のハーバード美術館に滞在した。今回の研修は博物館職員として、海外の博物館運営の現状を学ぶことを主な目的としたが、あわせて作品調査の許可をいただくことができた。博物館運営に関する研修内容については別に報告の機会があるので、『博物館研究』八月号に掲載予定)、ここでは当館で昨年春に開催した特別展「大安寺のすべて」に関連するハーバード美術館所蔵の絵画について紹介させていただくことにしたい。

本図(図1)は絹本着色の絵画で、縦三五・五、横一八・二センチメートルの小幅である。絵の支持体となる絹をよく観察すると、絵を描くための絹(画絹)でなく、平絹と呼ばれる一般的な絹に描かれていることが分かる。金色の身体で六本の腕を持つ如意輪観音が波間の岩場に座る姿が描かれている。これは観音がその住処である普陀落山に在る様子で、こうした画像については鎌倉時代以降の作例が多数知られている。ただし、本図については特に左側に金泥で記された文字が注目される。書き起さず次の通りである。

「□□年五<sup>十</sup>月廿二日 和州於大安寺書之」(豊敏(花押))

残念ながら文頭の元号は薄れて見えないが、「五年」の干支が「丁丑」となる中世の元号は、安土桃山時代の天正五年(一五七七)あるいは、鎌倉時代の建保五年(一一二七)に限られ、本



図の絵画表現から、本図の成立が鎌倉時代前半に遡るとは考え難く、年記は前者の天正五年に絞られる。とすればこの記述は、この金泥銘または絵画そのものを、天正五年に豊

敏という名の僧が大安寺で記した(または描いた)ことを意味するものといえる。

画面を改めて見ると、観音の姿が画面の中心ではなく、右寄りに位置しており、署名と花押が年記と離れて左下に大きく配置されていることに気付く。この署名と花押の位置は、この種の如意輪観音像では通例、龍王や善財童子のような、観音を礼拝する者が描かれる場所であり、本図の署名はそれを意識した配置と想像される。

そもそも仏画の画面中に署名と花押を記すのは珍しいが、本図の類例として、やはり在米の個人コレクション(the John C. Weber Collection)に含まれる「地藏菩薩来迎図」がある。この絵画では雲に乗る地藏の視線の先に堯範という僧の署名と花押が記され、自らの死後の救済を願う生前の供養のために記されたと考えられる。ここでは、来迎を受ける者が描かれる場所に署名と花押が配置されたといえる。堯範は周辺史料から十六世紀に活躍した興福寺僧と知られるから、「如意輪観音像」と同様に、十六世紀の南都で画中に署名と花押を記す例があったことが分かる。

残念ながら、豊敏という人物の詳細は不明だが、大阪の壺井八幡宮伝来文書(壺井文書)に、「求法縁起」と題された豊敏の史料があったことが影写本から知られる(東京大学史料編纂所データベースによる)。そこに記される花押は本図のものによく一致し、同一人物とみて間違いないだろう。

奈良時代にはインド、中国、ベトナムなどから僧が集う、国際的な最新仏教の学びの場であった大安寺は、鎌倉時代までには興福寺や東大寺、西大寺により支えられるようになり、その後室町時代以降近世までの間、天災もあって伽藍は衰退することになる。天正五年の大安寺は、明応三年(一四九四)の大地震の後、復興まならずの状態であったと想像される。この時期の大安寺の様相は示す資料は少なく、本図は天正年間の大安寺に関する稀有な資料として貴重といえよう。また室町時代の大安寺には、大安寺絵所という絵師集団が存在したことが史料から知られているが、その作と認められる作例は現在知られない。豊敏の実態とあわせさらに調査を進める必要があるが、本図が大安寺絵所の作である可能性も考え得よう。

本図は一九九二年に東京の古美術商(ロンドン・ギャラリー)から購入され、長らく米国の個人コレクション(Sylvan Bernet and William Burto Collection)であったが、二〇一四年にハーバード美術館に寄贈された。それ以前の伝来は明らかではないが、改めて大安寺との縁が広く知られることを、本図を大切に伝えてきた方々にも喜んでいただければ幸いと思う。